

暑き日のくもりや夜の人通り

稲露

すみきつて月のやとりし清水かな

龜由

こゝろまでさつはりしたる袷かな

梅香

水うては風のうまるゝ庭木かな

龜伶

ひるかほや垣根のそとはほそ流

石湖

さまくのはなしふえるや夕すゝみ

梅盛

ほしいのはきるにあふなし杜若

坎静

月さして猶さらすゝし軒の竹

積守

卯の花にうかけ寒し三日の月

二本松

菊露

夏きくのちりてものこるかをり哉

梅林

早うから明けり百合は草のなか

夏暁

人の来てともに長居やたかむしろ

如観

啼合すうくひすも居てほとゝきす

夢来

風すこしありてにきはふのほり哉

一界

みしか夜や風に追はるゝ雲のあし

陽谷

あやめさす手もとに風の匂ひかな

界孫

紫陽花や水にうつせは水のいろ

文水

舟棹のしつくかつゆかとふはたる

梅胤

竹植ですくにすゝしき料理かな

小浜

柳依

蝉なくや当分やすむ水くるま

梅洲

あたらしき道のつきけり藪しみす

栄花

ちらと見てそのゝちくらき蜩かな

旧尋

とふやうに見へぬ雨夜のほたるかな

柳翠

うち水のあとや乙鳥のはこひつち

珠山

暮きつて見れば青田の明りかな

閑甫

葉さくらのかげやまことの水の色

津未女

休むへき所とはなし蟬の声

幽夢

あいさつのすんてたかひに扇かな

松絲

みしか夜や明てもものこる酒のえひ

雅通

雨乞ひやぬれし羽をりのぬき心

幻士

すゝしけにこゝろうつすや夏の月

星圓

きくたひに見る気になるや時鳥

壽南

跡しさりしては見直すのほりかな

春羽

はし書略す

着かへれと袖にあつさのもとりけり

竹夫

過し日をおもひかへすや夜の暑さ

春眠

早乙女の顔はその日のよこれかな

児川

花の香やその俤を風かをる

如九

東郊居士遺吟

朝晴に流るゝ雲や花の上

東藤

かけみねと声はのこりて杜宇

椿二

卯の花や月いる跡の風明り

子弓

蓮の香や過ぎし月日のおもはるゝ

里水

手に提し笠やふはくゝ秋の風

うめ女

そのときも啼てこよひも杜宇

西美

星ひかる芦間に鳥の浮寝かな

竹澄

おもひ出すあつさや今年七めぐり

菊也

手向たる花もしほるゝあつさかな

金谷

風そふて木かけなかるゝ清水かな

田村

東藤

筆跡に心よりけり土用ほし

調齋

とこまでもつゝくやうなり田植うた

子弓

夏こもりやわすれぬ事の眼にうかふ

白風

ふる音を松にむすふや五月雨

うめ女

呼もせぬ蟬の鳴ゆく忌日かな

隈水

若葉から声に限なし時鳥

安積

竹澄

ぬれやすき袖や殊さら入梅くもり

淡湖

雨はれてしつかかな朝やころもかえ

安積

扇花

物たらずおもふ朝なや露すゝし

薰風

二三枚うえてやすむや初田うえ

梅枝

一儀ぬしは兄東郊居士の俳諧に遊ひし

高い木に月はかくれてほとゝきす

菊香

心をうけつき商道はいふもさらなり

飛ちかふ垣のうへなるほたるかな

一二

兄弟ともしたしくこたひ七回忌の

よい風のひとおしに来る青田かな

掬露

追福をいとなむとて四方の諸風子の

片そねをつゝむくもりや葛のはな

松亭

佳句を乞ひ法筵を開きて弔ともに

不手際もかなりすゝしき洗うちは

掬月

又旧交のしたしみをかさねるものなり